

サビエル生誕五百年



藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

マニラの高山右近像

カトリック教会ではパウロ生誕二千年を記念して昨年六月二十八日から一年間を「パウロ年」とした。

西洋の歴史を変えたと言われるパウロの言動は新約聖書の「使徒言行録」や「使徒パウロの手紙」として残されている。もしパウロが存在しなかったら、キリスト教はパレスチナ地方のローカル宗教

に留まっていたかもしれない。パウロ年で、日本の教会にとって大きなできごとといえば、パウロに直接関係はないが江戸時代の殉教者百八十八人が昨年十一月、長崎で列福されたことである。

豊臣、徳川時代に殉教したキリシタンは五千人とも一万人とも言われる。殺されはしな

それまでばく然とキリシタン大名の高山右近としてしか知らなかったのが、帰国後、右近について調べた。

高山右近は一五五二年、摂津(今の大阪)の高槻に生まれた。父親の友照は熱心なキリスト教信者で、右近も十二歳の時に洗礼を受けた。

洗礼名「ユスト」はポルトガル語で「正義の人」という意味で、今回同行した恩地神父も同じ洗礼名である。

高槻城主となり、秀吉からの信頼も厚く、茶道では千利休の七高弟の一人と言われたほどだった。

一五九一年、秀吉はキリスト教禁止令を出す。右近は棄教しなかつた。右近の才能を惜しんだ秀吉は茶道の師匠である千利休をつ

かわして、棄教を促すが「志を変えないのが真の武士」と答え、利休は説得をあきらめたという。

その後、加賀の前田家にお預けとなり、一六一四年には家康の海外追放令によりマニラに追放された。

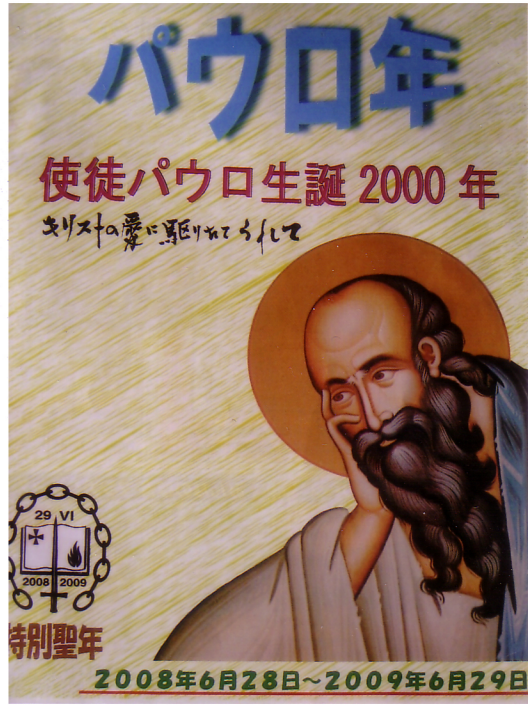
マニラではスペイン人のフィリピン総督、ファン・デ・シルバから「偉大なキリストの騎士」と大歓迎された。当時、マニラ郊外のパコにあるブラザ・デイラオ周辺には三千人を超える日本人が住んでおり、右近を歓迎した。

しかし、滞在わずか四十日で熱病のためこの世を去った。戦後、そのパコの公園に右近の銅像が建てられた。今回は時間的なゆとりがなく訪れなかつたが、本当の理由は団長の恩地神父が、あの銅像は政治臭が強いと積極的でなかつたからだ。

銅像を建てたのは独裁者として評判の悪かったマルコス大統領の妻イメルダ夫人が中心だった。独裁政治から目をそらさせ、日本からの援助の継続に銅像建設を利用したという説も強い。

棄教をテーマに「沈黙」を書いた遠藤周作が「右近をテーマにするのは余りに純粋過ぎて書けない」と言ったのを聞いたことがある。

純粋に信仰に生きて右近を利用する。誰が、何が正しいか、神は沈黙されたままなのは言うまでもない。(元山口放送取締役ラジオ局長)



「パウロ年」のポスター



マニラの高山右近像